

文型・文法 5、6

小林 典子

Grammar 5 & 6

KOBAYASHI Noriko

1. 「文法 5」「文法 6」のクラスの実施形態

文法 5 (レベル5) 担当者：小林典子、丹羽順子、長谷川守寿、福留伸子(2003 年度)

時間数	3 コマ/週 × 10 週
登録者数	30～40 人 (学期によって異なる)
内容	『中上級日本語文法』(試作改定版) の前半

文法 6 (レベル6) 担当者：木戸光子、小林典子、丹羽順子(2003 年度)

時間数	2 コマ/週 × 10 週
登録者数	30～40 人 (学期によって異なる)
内容	『中上級日本語文法』(試作改定版) の後半

文法 5 と 6 の両方をまとめて報告するのは、一つの教材の前半を文法 5 で、後半を文法 6 で使用しているからである。文法 5 は 1 学期間に 30 コマで、前半 6 課分、文法 6 は 20 コマで後半 5 課分を行っている。

2. 「文法 5・6」の目的

レベル 5, 6 では、他に、会話、聴解、作文、読解、など技能科目と漢字のクラスが用意されていることから、「文法」のクラスは文法知識を整理し、これを利用して文法的に正しい文の生産ができるようにすることを目標としている。取り上げる文法項目は一度は初級で扱われたもの、あるいは、他の技能科目で出現しているものなど、学習者にとっては馴染みがあるものである。学習者にとって、類似の表現をどう使い分けるのか、どのような状況で使用するのかなど、まだ十分にその知識が整理できていないのではないかと考えられるものを取り上げて説明している。学習者の中に蓄積されてきている様々な文法知識を整理し、これを実際の使用において利用できるようにすることが目的である。

3. 教材

『中上級日本語文法』(試作版)(木戸、小林、丹羽、松本、2000)は全10課構成になっていたが、その後、小林、丹羽によって、改定を加えながら、使用し、現在は全12課構成となり、次のような課の構成となっている。このうち、今期は1課から6課を「文法5」で、7課から11課を「文法6」で取り上げている。全12課を終わらせることは時間不足でできないことが多い。

『中上級日本語文法』(試作改定版)の内容

- | | | |
|------|-----------------------|--|
| 1 課 | くわしく述べる 1 | 様子・原因理由・目的
(ながら、まま、て、ずに、ないで、なくて、ように、ような、から、
ので、ために、等) |
| 2 課 | くわしく述べる 2 | 時と条件
(と、ば、たら、なら、て、てから、とき) |
| 3 課 | くわしく述べる 3 | 逆接
(のに、ても、が、けれども、ながらも、ておいて、等) |
| 4 課 | くわしく述べる 4 | 名詞修飾
(説明を加える、内容を表す、という等) |
| 5 課 | くわしく述べる 5 | 文の中に文を入れる
(の、こと、か、と、ように) |
| 6 課 | 気持ちを表す 1 | 気持ちを表す助詞
(は、も、だけ、しか、まで、さえ、ばかり、ぐらい) |
| 7 課 | 気持ちを表す 2 | 考えを述べる
(のだ、わけだ、はずだ、だろう、にちがいない、かもしれない、そうだ、
ようだ、らしい、べきだ、たほうがいい、てはいけない、等) |
| 8 課 | 文への組み立て: | くつつけるか、離すか
(文の従属度・独立度について) |
| 9 課 | 「いつ」を中心にして述べるか | (る、た、ている) 等 |
| 10 課 | 「だれ」「何」を中心にして述べるか | (動詞の自他、受身、使役、使役受身、授受動詞) |
| 11 課 | 他の人の動作がどのように「私」に関係するか | (受益・被害・方向を示す表現、てもらう、てくれる、られる、てくる) |
| 12 課 | 聞き手(読み手)の存在と話し言葉・書き言葉 | (丁寧体、普通体、意思、願望、等) |

本教材の各課は文法の要点ごとに、〈解説〉〈用例〉〈練習〉のセットを要点の数だけ用意してある。また、複数の要点をまとめた〈総合練習〉も適宜配置してある。これらの練習をすることによって、文法的な意味の対立が見えるように、練習問題を工夫して用意しているつもりではあるが、まだ十分とは言えず、現在までその改善に数年を費やしてきている。

4. 授業の進め方

文法5と6では、授業の進め方が多少異なり、以下のような流れになっている。

「文法5」の場合

- ・ 文法項目の紹介 → 〈用例〉の解説 → 〈練習問題〉 → 学生からの質問への説明
- ・ 課の終了後、学生はその課の宿題を提出

「文法6」の場合

- ・ 予習宿題（次回予定教材の練習問題部分）→ 授業の前の指定日までに提出→ 授業当日、誤りに赤線入れたものを返却→ 授業で教材の〈用例〉を使いながら解説、〈練習問題〉のフィードバックおよび学生からの質問への説明
- ・ 課の終了後、学生はその課の宿題を提出

レベル5と6の授業の進め方の違いは予習宿題をさせるかどうかである。レベル5の受講者に対しても予習宿題を課したことがあるが、レベル5では、間違いが多すぎる、友人の宿題を写す場合がある、など、自習が困難である様子がみえたため、今期はレベル6のみで実施している。レベル6の場合には、かなり積極的にこの予習宿題に取り組んでいる様子が見え、そのために、教師側も問題になる点を予めつかんで、授業することができるという利点を感じている。

文法5も文法6も通常30人を越える多人数のクラスであり、かつ、クラスの目的も文法知識を深め、整理することにあるため、練習問題の答えに対する解説といった講義形式で進めている。その結果、そのような内容を求めている学生には好評である一方、少人数のグループでの言語使用練習を期待する学生には不満が残るクラスであろうと考えられる。

5. 評価

「文法5」「文法6」ともに、1回の最終テストで成績を出している。宿題については、成績の評価対象に入れていないが、宿題提出に熱心な場合はテストの好結果に反映されている。宿題を評価の対象にしていないのは、宿題が評価されると考える学生が人のを写して提出する場合があるからである。